

ストラだとばかり思っていたんですよ。
——フルートを始められたのは？
酒井…高校生ですね。

——ということは中学生のときは音楽関係のクラブではなかったのですか？
酒井…ワンダーフォーゲル部ですね。

川合…中学にワンゲルがあるんですね！
酒井…ありましたね。奈良とか、滋賀とか、京都の山に毎月必ず一回行きました。元々父親が山好きで、小学生のときは、日曜日は山でしたからね。

——すごく多感な頃に自然に触れたのですね。
酒井…そう。で、地図や地形図の読み方を鍛えられて。

——それも今のご活動に生かされているのでしょうか？
酒井…今でも好きです。地図を見てたらくんぼでも時間いけます。

——その後高校で吹奏楽部に入部されました。
酒井…そうですね、新入生歓迎会で先輩方が演奏された「マーチ・オーパス・ワン」にえらく感心してしました。僕が中学3年生の時の課題曲なんです。昭和59年の課題曲。

川合…その頃、私は影も形もないです。
——酒井先生のご経歴によると高校在学中に「たなばた」を作曲されています。フルートを始められた直後だけに、とんでもない飛躍のように思えます。
酒井…曲はもう5歳ぐらいから書くのは好きだったから…。

——その延長線上で？
酒井…そうですね、まずファンファーレを

書き、アンサンブルを書き、で、編曲も始めました。それで、「たなばた」を書きました。
——スーパー高校生ですね。
小野川…自分の部活動のバンドのためにファンファーレ書いたり、編曲したの？

書き、アンサンブルを書き、で、編曲も始めました。それで、「たなばた」を書きました。



酒井…そうですね、自分たちのアンサンブル用にフルート四重奏を書いたりしました。
川合…すごいですね。

酒井…いや、僕の曲は音出しの段階や楽譜の初見段階で、みんなイヤヤとか言ってます…(笑)。
——では、「たなばた」は今でこそ出版されていますけど、その時は単なる自分用の楽譜だったということですか？
酒井…そうですね。自分用の楽譜でした。

☆ **渡米、飛び込み営業、そして「たなばた」出版!**

——楽譜がどうやって出版されるに至ったのか経緯を教えてくださいませんか？
酒井…それは大阪音楽大学に進学してからの話になります。

辻井(清幸)先生に楽譜を見てもらったんです。先生が短大の授業で、「ちょうと音出ししたれや」みたいな感じで、短

大の授業で取り上げてもらいました。そしたら辻井先生に「これちょうと、スコアもつてアメリカについてこい」と言われた。そこで、大阪市音楽団のメンバーの方とミッドウエスト・クリニックにスコアとカセットテープを携えて渡米しました。



川合…カセットテープ、懐かしい！
酒井…出版社の人に、「聞いてください、新作なんです。」って。
——世界の出版社に売り込みに行かれたのですか？
酒井…クリニックでは出版社が新譜販売などのブースを出しているんです。その出版社が売ろうとしているところに、逆に売り込みに行きました。

（同、驚愕）
酒井…一番に声をかけてくれたのが「デハスケ」ってところでした。
他の会社は、スコアとテープに「商品の

価値なし」とラベルが貼って航空便で返送されてきたところもありました。
この曲は海外の出版社で取り扱っても

らえることになったのですが、日本では当時、吹奏楽譜の出版社は、東亜音楽社とかあったけれども面識がありませんでした。アメリカにも日本の出版社は進出していませんでしたし。

——そのころの酒井先生のことを、小野川先生は覚えていらっしやいますか？
酒井…小野川先生、「たなばた」の初演の時の奏者でしたよね？

小野川…大学を卒業して、トランペットの教育助手として短大の授業のサポートをしていた頃で、確か高橋徹さんの授業だったと。発表会で演奏したね。

酒井…そうそうそう。1991年12月14日でしたよ、「たなばた」の初演。
——すごい、ちゃんと記憶されている。酒井…それは覚えてます。

小野川…だから俺、いちおう初演プレイヤーやねん(笑)。
サックスとユーフォのソロがあつて。織姫と彦星を連想させる曲だというイメージを持っていたよ。

——その後のご活躍ぶりは私達も知るところです。
先ほどお話を伺った、小さいときに大阪市音楽団でご縁のあった永野慶作先生から、春の選抜高校野球の入り場行進曲の編曲を引き継ぐ形で手がけておられます。

酒井…そうですね。実は、永野先生が出版社に私の連絡先を許可なく教えたみたいで(笑)。
ある日毎日新聞社からいきなり電話がかかってくるびっくりしました。「永野先生から連絡先を伺ったんですけど。」とか言ってる。事前の連絡もありませんでしたよ(笑)。

——今年は星野源さんの「恋」を酒井先生がアレンジされています！
楽しみですね。